

宝永六年の東大寺大仏殿堂供養に於ける真宗と時宗 ・融通念仏宗の対比

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-07-10 キーワード (Ja): キーワード (En): “Tōdaiji-temple memorial service” , Shinshū, Ji-shū, Yuzu Nembutsushū 作成者: 古賀, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1245

Comparison of Shinshū 《真宗》, Ji-shū 《時宗》 and Yuzu Nembutsushū 《融通念仏宗》 in regard to the “Tōdaiji-temple memorial service” 《堂供養》 in 1709

KOGA Katsuhiko

Key words

“Tōdaiji-temple memorial service” / Shinshū / Ji-shū / Yuzu Nembutsushū

Summary

In this report I attempt to correspond Shinshū (sect) in “the temple memorial service” 《堂供養》 to Tōdaiji Temple Hall of the Great Buddha 《東大寺大仏殿》 completion memory ceremony of 1709 and comparison of the Ji-shū, Yuzu Nembutsushū of Buddhism.

At first I survey a Buddhist memorial service schedule day by day.

Then, I look at the aspects of each denomination.

Then, I compare three Buddhist memorial services. With three Buddhist memorial services, there is it by construction start of construction ceremony 《新始法要》 of the Tōdaiji Temple Hall of the Great Buddha of from April 2, 1688 to April 8, the Tōdaiji Temple great statue of Buddha completion memory ceremony (“consecrating ceremony of a newly made Buddhist image”) from March 8, 1692 to April 8, a completion commemorative ceremony (“the temple memorial service”) of the Tōdaiji Temple Hall of the Great Buddha of from March 21, 1709 to April 8.

For example, there was a Buddhist priest who entered services for all three Buddhist memorial services in the Higashi-Hongwan-ji Temple. But I was not in the Nishi (west)-Hongwanji Temple group.

Finally I carried out a comparison of the ceremony of the Shinshū the Ji-shū, the flexibility Nembutsu sect of Buddhism mainly on the order of a ceremony of

the Buddhist memorial service, the schedule of the Buddhist memorial service.

Existence of the Ji-shū and the Yuzu Nembutsushū in which I surveyed three Buddhist memorial services, and regarded this grand ceremony entering a service as the opportunity of the sect group expansion and the rise of popularity from the above-mentioned analysis became clear in the conclusion. At the same time, the aggressiveness of the Jodo-shū of Buddhism that the general 《將軍》 helps overall is worthy of special mention.

Why did I not choose the way which carried out the Buddhist memorial service in the religious community when showed the presence in Shinshū, a Buddhist memorial service of another religion either? Because this is a merely hypothesis, and I would like to engage it is as a problem in future.

宝永六年の東大寺大仏殿堂供養に於ける真宗と時宗・融通念仏宗の対比

古 賀 克 彦

宝永六年の東大寺大仏殿堂供養に於ける 真宗と時宗・融通念仏宗の対比

古賀克彦

〈キーワード〉 東大寺殿堂供養／真宗／時宗／融通念仏宗

序 はじめに

本誌前々号に寄稿した「近世の東大寺大仏千僧会等における真宗と時宗・融通念仏宗の対比」⁽¹⁾では、江戸時代の貞享五年（一六八八。九月晦日に元禄と改元）四月二日から八日までの大仏殿の新始記録（各地から三千五百人の大工と千人の僧、参詣人は六万、奉加錢千両が集まった）を、同時異筆のものによって比較した（以下、前々稿と称す）。

それを承けて本誌前号では、その四年後（元禄五年Ⅱ一六九二）の東大寺大仏完成による開眼供養を採り挙げ、「元禄五年の東大寺大仏開眼万僧供養に於ける真宗と時宗・融通念仏宗の対比」⁽²⁾と題して寄稿した（以下、前稿と称す）。

そして本稿では、更にその十七年後の宝永六年（一七〇九）に举行された、東大寺大仏殿落慶法要に該当す

る「堂供養」に於ける、真宗と時宗・融通念仏宗の対比を試みる。併せて、この三法要の総括もしてみよう。先行研究としては、平岡定海の諸著作が挙げられる。^③特に、平岡が、

江戸時代における東大寺の大仏殿の再建に関する記録としては現在にいたるまで十分な根拠となる史料が発見されなかったが、近時、勧修寺宮門跡、筑波常遍師の御依頼をうけて、同寺の大経蔵の調査におもむき、東大寺（第十一箱）なる墨書銘のある書箱を調べているうちに「大仏殿再興発願以来諸興隆略記」と名づけた桐箱入の二冊の冊子本を見つけることができたのである。本書については大屋徳城博士が、「東大寺史」の編著に際して引用されているが、全文の紹介については今般御門跡の許可を得ておこなうのもって初とする。

この史料には、単に公慶上人の事績のみならず公盛↓公俊↓庸訓の四代の大勸進上人の事績を中心に、その間に於て東大寺内で興隆された伽藍のこと、なканずく大仏殿の再興という江戸時代における東大寺の大事業について、庸訓によって事細かに編纂されている。その意味で、いやしくも東大寺の歴史をひもとくとんとするものの必見の史料といえる。^④

と述べている史料「大仏殿再興発願以来諸興隆略記」（以下、『興隆略記』と略称する）は最重要であろう。それでは以下に、今回用いる史料を掲げる。

史料① 大佛殿堂供養記^⑤

史料② 大佛殿再建記^⑥

史料③ 南都東大寺 大殿落慶上棟儀 宝永六年己丑三月十七日^⑦

史料④ 「藤田祥光著『寶永再建大佛殿』」中の「寶永六年大佛殿堂供養控」

史料④ a 「藤田祥光著『寶永再建大佛殿』」中の「東大寺大佛殿堂供養二付諸方ヨリ出仕之覺」

史料⑤ 「宝永六年再建大仏殿」中の「東大寺大佛殿堂供養ニ付諸方ヨリ出仕覺」

この中で、史料①は「東大寺叢書」第二に所収のもので、標題は「大佛殿堂供養記／執行祐想記之寫已／法印公祥」で、「一從三月廿一日開關」至「四月八日結願」迄。毎日從「諸寺諸山」出仕法事諷經香拈等有之。左記之。」の後に、法要の日程が記されているので、それを抄出した。掉尾には、「表紙に／寶永六_丑年四月日執行兼奉行大貳寺主祐想／東大寺大佛殿堂供養日記草書／暇日清書校合可有之也」とある。

史料②は、島津良子・坂東俊彦「玉井家藏「大仏殿再建記」解説および史料翻刻 第三回」所収の「大仏殿再建記」第一冊「天」巻の翻刻から法要日程を抄出した。

史料③は、天野信景『塩尻』三十三の「○南都東大寺／大殿落慶上棟儀宝永六年己丑三月十七日」の項による。最初に「同月廿一日供養自今日至四月八日毎日法花
千部南京密宗仏聖加持音楽」とある。

史料④⑤は、奈良県立図書館「ふるさと貴重書庫」の「ふるさとコレクション」内「藤田文庫」に所蔵されている（④は請求記号 0090-4-50、資料 ID151217234。⑤は請求記号 090-4-181、資料 ID151217574。④aは④の一部）。同館ホームページの「まほろばデジタルライブラリー」で画像を見る事が出来る。藤田祥光（一八七七～一九五〇）の編著および手写記録類として当時の奈良県立奈良図書館が製本したもので、標題の「寶永再建大佛殿」「宝永六年再建大仏殿」は「奈良県立奈良図書館郷土資料目録」（一九七九年）による。

史料④⑤は何れも二十世紀の写本ではあるが、翻刻はされていないようなので、いまここに抄出を試みる。

史料④ 「藤田祥光著『寶永再建大佛殿』」中の「寶永六年大佛殿堂供養控」

表紙題字「寶永再建大佛殿／藤田祥光著」

（標題）「寶永六年／大佛殿堂供養控／内藤善右衛門」（中略）

一（三月）廿一日 晴天

一辰之刻御寺中不殘眞言院工御添〔参力〕（中略）

廿二日 晴天

一佛餉加持 公盛上人 會中毎日御勤（中略）

廿三日 晴天

一巳之刻寺中御出仕論義有之候事

廿四日 晴天

一辰刻南都一向宗出仕京都靈究〔山丸力〕山長樂寺出仕

一京妙心寺惣代 同鹿谷法然院（中略）

廿五日 曇天

一五ツ時御寺務御成御齋被進候（中略）

一午刻寺中出仕上人様御断被仰御出仕無之（中略）

一高野常樂院谷惣代

一四ツ時學侶衆諸役人御齋

一九ツ時堂中三ヶ院御齋（中略）

廿六日

一午刻本願寺門徒寺僧出仕

一遊行上人代京莊嚴寺 播州淨土寺代歡喜院（中略）

廿七日 晝時迄雨八ツ過ヨリ晴

一河州上太子代 無量壽院（中略）

廿八日

一 招提寺衆中出仕（中略）

廿九日

一 午刻 薬師寺衆中出仕

一 未ノ刻東大寺 舞樂有之（中略）

一 中宮寺様御参詣

一 圓照寺様尼衆参詣 まんちう折遣之（中略）

晦 日

京都智積院代 明星院 武州護持院代 梅心院

初瀬小池坊代 月輪院 武州成満院代 超昇寺

武州護國寺代 覺勝院 紀州高野山聖坊惣代常德院

摂州天王寺 一心寺 河州譽田 大満院（中略）

四月朔日

一 知恩院代如来寺門中上下凡六百余人余

一 午之刻和州畑郷

一 勢州松阪「坂」樹教寺

二 日

一 法隆寺出仕

一 河州金剛山大宿坊名代地藏院

一 醍醐三寶院様ヨリ御使者御香儀金五百疋（中略）

三日

一 京知恩院派大阪「坂」門中出仕凡上下五百人余

一 京誓願寺代法雲寺（中略）

四日

一 京知恩院派大阪「坂」百万遍門中出仕（中略）

五日

一 巳之刻 西大寺衆出仕

一 未刻菩提山出仕

一 大阪「坂」浄土眞宗三光院「寺」

一 午刻 樂人中齋（中略）

六日

一 平野大通上人并門中衆僧貳百十五人出仕下々共凡七百人

一 和州釜口惣代成龍院 同西松尾寺惣代 福壽院 余

一 同當麻寺惣代地藏院

一 大通上人宿坊へ御越被成候事

七日

一 一乘院多喜宮様御參詣御門下中御供

御加羅御香儀金五百疋（中略）

一多喜宮様内陳被成座内へ御菓子杉折二重ニして上ルは
菓子下ル饅頭_ルて被進候まんちう五丁入堂〔壺力〕
御家来中へ同断（中略）

一京黒谷金戒光明寺派大阪〔坂〕門中出仕
一和州桃尾山龍福寺同安樂院

一申之刻公盛上人様并弟子中十人出仕装束法眼衲衣
両部密法於〔修力〕之

八日

一已之刻寺中不殘御出仕（中略）

一寺中不殘勸進所_エ御出（中略）

一法事相濟申候上_ルて大和河内聖人數九十六人焼香
但堂外_ルて初之

九日（中略）

一廿二日（中略）

一諸講中江供養御祈禱札一々御持参被成候

靈山 丸山長樂寺 誓願寺

右出仕又ハ使僧御禮御出被成候（中略）

廿四日

百万遍 獅〔鹿〕谷法然寺〔院〕 禪林寺

智積院 并行智坊 七条金光寺

知恩院門中

長香寺 聖徳寺 如來寺

廿八日(中略)

青「粟生」野 光明寺 清水 成龍「就」院

供養御礼使僧法詮

妙心寺 靈安寺

等持院 金閣寺

一上人號御禮御參内此度御勤被成筈之處直

御參内之御願ニ付(以下略)

史料④a 「藤田祥光著『寶永再建大佛殿』」中の「東大寺大佛殿堂供養ニ付諸方ヨリ出仕之覺」

寶永六^巳年三月廿一日ヨリ四月八日迄

東大寺大佛殿堂供養ニ付諸方ヨリ出仕之覺

一三月廿一日 出仕 東大寺衆僧未「末」寺迄

一同 廿二日 廿三日 東大寺

一同 廿四日 南都東本願寺門中

辰ノ刻ニ京妙心寺衆 靈鷲山

念番「捻香力」有 正法寺 安養寺 長樂寺

一同 二十五日 (※空欄)

一同 二十六日	南都西本願寺門中
一同 二十七日	藥師寺
一同 二十八日	唐招提寺
一同 二十九日	舞樂有之
一同 晦日	長谷寺名代月輪院
一 四月朔日	京都知恩院名代三有「百力」人余
一同 二日	法隆寺
一同 三日	大坂知恩院門中八拾ヶ寺余
一同 四日	大坂 百万遍門中
一同 五日	西大寺 巳ノ刻 菩提山 木ノ刻
一同 六日	平野 大念佛寺
一同 七日	大坂 黒谷門中
一同 八日	東大寺安井御門跡
右之通二候	

史料⑤ 「宝永六年再建大仏殿」中の「東大寺大佛殿堂供養ニ付諸方ヨリ出仕覺」

表紙題字「寶永六年再建大佛殿ノ町代 高木又兵衛ノ文書」(中略)

寶永六年_{丑巳}年三月二十一日ヨリ四月八日迄

東大寺大佛殿堂供養ニ付諸方ヨリ出仕覺

一 三月廿一日 東大寺衆僧末寺迄

一 同 廿二日 (※空欄)

一 同 廿三日 東大寺

一 同 廿四日 南都 東本願寺門中

辰ノ刻二 同日 靈鷲山 正法寺

京妙心寺衆念番有 安養寺

〔捻香力〕 長樂寺

一 同 廿五日 (※空欄)

一 同 二十六日 南都 西本願寺門中

一 同 二十七日 藥師寺

一 同 二十八日 招提寺

一 同 二十九日 舞樂有之

一 同 晦日 長谷寺名代月輪院

一 四月朔日 京都 知恩院名代三百人余

一 同 二日 法隆寺

一 同 三日 大坂 知恩院門中八十ヶ寺余 畑郷中

一 同 四日 大坂 百万遍門中 ノ寺

一 同 五日 巳ノ刻 西大寺 未ノ刻 菩提山

一 同 六日 平野 大念佛寺

一同 七日 大坂 黒谷門中

一同 八日 東大寺安井御門跡

右之通二候（中略。以下、奥付）

寶永六年大佛殿堂供養袋

来ル丑三月廿一日ヨリ四月八日迄

大佛堂供養

南都東大寺勸進所 角印 印

大坂北堀江御池通三丁目

八幡屋清助

寶永六年丑三月二十四日

この史料⑤奥付の日付は法要中であり、先の史料③は法要前なので、共に記録ではなく予定表と考えられ、実際に行われた内容とは異なっている可能性もある。よって、史料価値としては①・②の方が重かるう。また、④aと⑤は、ほぼ同一内容である。史料④は日次記の形式だが、時刻、出仕寺僧の情報が詳しく、当「堂供養」研究に欠かせない文献であろう。

これらの各史料は、内容の重複する場合もあるが、お互いの闕を補っている部分もある。それを整理する為に、表組に纏めて揭示する事で、相違点を明らかにし、夫々の持つ意味を考察したい。それによって、近世の東大寺大仏千（万）僧会に於ける念仏系教団、就中、真宗（東西本願寺）と時宗、併せて大念佛宗（融通念佛宗）教団の様相の一端が垣間見られると考えるからである。よって、これらの僧団・教団を中心に、対比しながら見て行こうと思う。

なお、本稿では近世教団であることに鑑み、「時衆」ではなく「時宗」の語を用いている。

以下、翻刻を転記するに当たっては、重要な箇所は太字にして強調し、レイアウトは適宜変更した。網文や月日等、見出しとなる部分の書体も太字とした。文中の「／」は改行箇所を表す。尚、標出・頭注の類は割愛した場合もある。字下げせず、一行空きで引用した場合もある。

また、引用文中には、現在では差別用語とされる歴史的名辞が散見するが、本稿では引用儘とした。これは、学術的見地からその用語を残すことで歴史研究を進展させ、現代における差別解消を推進する願いからである。寺格・堂班・類聚等と総称される当時の階級を示す術語も用いている箇所もあるが、これも同様である。

一 法要日程の比較

以下、掉尾に「法要対照表」を作成したので御覧頂きたい。

『興隆略記』宝永四年項に

堂供養執行之日数開眼供養半減十五日執行之段申上置候処、成満院<sup>護持院
隠居也</sup>大僧正御申候者、如旧例四月八日之結願ニテハ三月二十四日開白ニ当り候、此日取不宜候間吉辰三月二十一日開白有之、十八日之執行ニ相願可然旨ニ付、

とある。公盛は開眼供養同様、一ヶ月（正確には三十一日間）を予定していたが、幕府は半分の十五日、隆光が十八日間の妥協案を出した、とある。思えば貞享五年の大仏殿鉦始は一週間であった。

さて、堂供養（落慶法要）初日の三月二十一日は華嚴会で東大寺出仕。史料①は「兩堂三ヶ院末寺等衆僧出

仕。都合四十九口」、②は「当寺学侶両堂衆末寺等四十八人」とほぼ同じ。③には「凡出僧百口」とあるが、寧ろ翌二十二日記載の「南都十三ヶ寺僧侶凡四十八人」の方が合致する。

三月二十二日は①②④共に、公盛の出仕・勤務を書く。

三月二十三日は各史料共通で東大寺出仕。①で「講問」、②に「三論宗論義」。史料③だけ「南京真言宗九十口」とある。

三月二十四日は①に「東本願寺門徒徳願寺權律師良胤。伴僧十二人。同專念寺祐誓。伴僧八人。同教行寺了伯。伴僧四人。各于大佛殿出仕。法事勤之也。未刈。京靈山正法寺第廿五代國阿上人。同丸山安養寺同長樂寺等。右三ヶ寺之衆僧。各出仕。法事勤之也」とある。東本願寺派の伴僧の総数は二十四人で、次の②と一致する。③の記載人数は総じて多く「同（南京）東門浄土真宗六十口」とある。④は「南都一向宗出仕京都靈究山長樂寺出仕」と読めるが、これは「京都靈山・丸山・長樂寺」のことだろう。

①の靈山正法寺國阿だけ、他寺院にはない「第廿五代」と代数が入る。按ずれば、前回の開眼供養と異なり、今回は代僧が多い。弱小とはいえ、上人号を有する一宗一派の主は南都関係以外では、この國阿と大念仏寺の融観大通だけであろう。享保十一年（一七二六）九月五日（位牌。同寺過去帳では二十五日。ただし後者は二十五代ゆえであろう）寂の二十五代國阿（圓隆）については嘗て言及した事がある。今次法要も前回同様、靈山正法寺・丸山安養寺・東山長樂寺の三山揃い踏みである。

なお、公盛と関係があるとも思えないが、紀州高野山僧に「盛」字を持つ者が多い。

②には、「東本願寺派南都三箇寺并伴僧二十四人出仕 先唄 次焼香 次三誓偈 次讚 次念仏回向 次退出 行列仕丁六人 上下着四人 素襖十人 僮僕雑々」「拈香僧衆 京妙心寺惣代 同鹿谷法然院」とある。④a⑤共に「京妙心寺衆念番有」とするが、「念番」は「捻香」、即ち「拈香」ではなからうか。拈香僧衆の

トップを切ったのは、臨済宗の妙心寺だった。

三月二十五日は②のみ、「靈山正法寺丸山安養寺東山長樂寺并寺僧 衆僧十五人出仕／先伽陀 次敬礼天人 次無常偈 次踊躍念仏 次願以此功德 次十念 次退出」とある。①④④a⑤共に前日の三月二十四日出仕である。

三月二十六日は①に「西本願寺門徒。南都淨教寺民部卿行省。同末寺十四ヶ寺。正覺寺了宗。從僧四人。郡山正願寺湛慧。從僧同斷。同所淨照寺遵海。從僧同斷」、②に「西本願寺派南都郡山四箇寺并其末寺十四人伴僧十七人出仕／先伽陀 次阿弥陀經行道 次回向 次念仏 次退出」とあり、各史料共に「西本願寺」「南京西門中五十口」等と出る。

一般書の平岡定海『大佛勸進ものがたり』（註（3）に掲出）に、「二十六日には京都莊嚴寺・播州淨土寺・西本願寺」が参列、と記載されている。拈香と出仕が弁別されていないのも如何かとは思うが、特に「京都莊嚴寺」では読者には伝わるまい。他の播州淨土寺（これも実は代理の歡喜院だが）・西本願寺の大坊と比して、普通の一末寺だからである。ここは①に「遊行上人代僧。京都莊嚴寺覺阿。同七條宗壽院兩人」、②④に「遊行上人代京（都）莊嚴寺」とある如く、遊行上人代僧とすべきであろう。

三月二十七日は①②④共に上太子無量壽院。③④a⑤は藥師寺とする。

三月二十八日は史料全て唐招提寺。人数は②に「唐招提寺衆僧三十五人出仕」、③は「招提寺七十五口」。

三月二十九日は十八日間の中日に該当する為、藥師寺と東大寺が出仕している。③は興福寺になっている。

三月三十日は新義と古義の真言宗が出仕している。成満院とは隆光のことである。因みに、先の『大佛勸進ものがたり』では「江戸の護持院隆光の代として梅心院」とあるが、時の護持院は、護国寺に居た快意が隆光の後釜に転位している。③の「紀州高野山衆僧凡二百余口」は多すぎではないか。②④はほぼ同じだが④の「紀

州高野山聖坊惣代常德院」の「聖坊」は「聖方」の意味であろう。④a⑤は「長谷寺名代月輪院」のみ記す。

四月一日は①②④a⑤共に知恩院名代だが、③は「北京智恩院尊統法親王 円理大僧正 衆僧凡一百三十五口」と貴種が来臨したことになっている。人数も二百・合計百六十四・百三十五・六百・三百と幅がある。

①「和州畑之郷真言宗」、②「和州畑卿〔郷〕真言宗衆僧十六人」、④「和州畑郷」との記述もある。

なお、①に「勢州松坂樹敬寺隨譽上人」、②に「勢州松坂樹教寺」、④に「勢州松坂〔坂〕樹教寺」と出るが、正しくは樹敬寺で、読みが「じゅきょうじ」である事が判明する。前稿史料①には元禄五年四月六日、前稿史料②にはその翌日に出る。「隨譽上人」とあるから浄土宗寺院である事も明白だが、開山は俊乗房重源で、大仏供養に結縁する立派な理由がある。また知恩院末でもあり、この日に拈香したのであろう。本居宣長の菩提寺としても知られている。

四月二日は③以外の記載は法隆寺である。その③は「黄檗山万福寺衆僧凡一百五十口」。他の史料に見えないところから、これは誤報か。①②④では醍醐三宝院門跡使者が遣わされている。

四月三日も③以外は①「坂陽知恩院門中」、②「知恩院派大坂衆僧八十一人伴僧」、④「京知恩院派大阪〔坂〕門中出仕凡上下五百人余」、④a⑤は「大坂知恩院門中八十ヶ寺余」である。④の人数は多すぎないか。③は独自の記載で「西大寺衆僧凡七十口／畑郷密宗六十口」。但し⑤にも「畑郷中ノ寺」とある。④aと⑤はほぼ同内容だが、この箇所だけ相違する。先に述べたように、①②④は四月一日に「畑郷」が出る。同じく①②④で「京都誓願寺名代」が拈香。

四月四日も③以外は①「攝州大坂浄土宗百萬遍門中各出仕」、②「京百万遍知恩院〔寺〕派大坂衆僧六十人出仕」、④「京知恩院〔寺〕派大阪〔坂〕百万遍門中出仕」、④a⑤「大坂百万遍門中」である。その③は「内山〔永久寺〕僧衆六十口」。

四月五日①「西大寺一山衆僧出仕／菩提山正暦寺一山衆僧出仕」、②「西大寺衆僧三十二人出仕／菩提山正暦寺衆僧二十人出仕」、③「菩提山僧衆五十口／谷口僧衆四十口」、④「西大寺衆出仕／菩提山出仕」、④a「西大寺／菩提山」と珍しく一致している。③の「谷口僧衆」は「釜口」^{かまぐち}「山長岳寺」僧衆」の意だろう。

なお、①に「大阪「坂」天満浄土眞宗三光寺」、②に「大坂浄土眞宗三光院」、④に「大阪「坂」浄土眞宗三光院」と出るが、大阪市福島区に本願寺派三光寺が現存する。「浄土眞宗」との宗名にも留意すべきであろう。

四月六日は①「河州平野融通大念佛宗大通和尚出仕勤_レ之。衆僧凡二百人餘」、②「融通念仏宗河州平野大通上人并門中衆僧二百十五人伴僧四百三十人出仕」、③「摂州平野大念仏宗衆僧凡一百八十口」、④「平野大通上人并門中衆僧貳百十五人出仕下々共凡七百人余」、④a⑤「平野大念佛寺」と連日一致している。人数はバラバラだが、②だと合計六百四十五人であり④の七百人に近くなる。因みに、後述する『東大寺三綱所日々記』同日条にも「大念佛宗河州平野上人大佛／出仕法事有之衆僧二百人余也御寺務廳聞ニ／御出御供ニ参也」とあるが、平野は摂州ではなからうか。

②④の拈香僧衆に先の「和州釜口」「山」惣代」が居る。

四月七日は②に未記載で惜しまれるが、①に「攝州大阪「坂」黒谷門中浄土宗出仕」、④に「京黒谷金戒光明寺派大阪「坂」門中出仕」、④a⑤に「大坂黒谷門中」とある。③のみ「忍辱山僧衆三十九口」である。

最終四月八日は最勝会の法要で、当然東大寺が勤めるが、吉田栄治郎「近世大和の三昧聖」⁹が注目するよう、③には「大和國中聖方凡五百員」との記載がある。

この吉田論文の本文に、「上別府氏が引く安政二年（一八五五）の「南都大仏殿供養之次第」によれば」「五畿内聖都合九十七人」¹⁰とあり、その「南都大仏殿供養之次第」の註に

上別府氏前掲「三昧聖と葬送」に引用されたもので高野山奥之坊所蔵とされるが、本稿作成時点では直接

確かめていない。

とある。当方も未見である。同じ頁に、

上別府茂氏は「三昧聖と葬送」(『日本の民俗と宗教』二、弘文堂、一九八〇)において、大和国と特定しないが、龍松院による十七世紀末期の五畿内三昧聖支配権の確立をいい、幕末に至るまでのその拡充と強化を指摘する。^⑪

ともある。

ここで度々出てくる上別府茂「三昧聖と葬送」であるが、本文に「三昧聖側の史料である『南都大佛殿供養之次第』(安政二年、量阿弥徳門書写)」、註に「高野山奥之坊所藏文書」とある。^⑫

今回紹介した、④にも「法事相済申候上东て大和河内聖人数九十六人焼香但堂外东て初之」との記載がある。ほぼ同人数の記載である。堂外にて焼香というのが、僧俗の区別を感じる。

二 各宗派の様相

以上の比較から気付いた事を列挙する。なお、詳しい比較は表を参照頂きたい。

「ヨコ」の時系列的考察は前項で述べた。ここでは前稿に準じて宗派系統別に見て行こう。

顕 密

前稿の大仏開眼法要には新義真言の豊山長谷寺の出仕が見えない、と書いたが今回は先述の如く、三月三十

日に新義と古義の真言宗が出仕している。特に新義では、京都智積院代明星院・武州護持院代梅心院・初瀬小池坊代月輪院・武州成満院代超昇寺・武州護國寺代覚勝院が出る。武州護持院・武州成満院・武州護國寺の綱吉期に勃興した三ヶ寺が揃って代僧を立てて参詣している事実は大変興味深い。武州成満院代の超昇寺は隆光生地近隣で、綱吉死後、河内通法寺に移住の後、一七〇九年に隠居した寺である。一七二四年、隆光は当寺で亡くなり、墓石が建てられた。通法寺にも墓があるが其々近代初頭に廃寺となった。¹³⁾

この成満院とは隆光のことである。因みに、平岡定海『大佛勸進ものがたり』では「江戸の護持院隆光の代として梅心院」とあるが、時の護持院は、護國寺に居た快意が隆光の後釜に転位している。

古義真言は勸修寺門跡が今回も東大寺寺務兼任の為、出座している。高野山の名も見える。南都の真言も出仕。

天台は今回も、安井門跡が華嚴長吏で東大寺門跡寺院の尊勝院を兼務し二月堂別当兼帯であり出仕している。前回・前々回同様、天台・真言共に、東大寺寺務や二月堂別当を兼帯しているが故の出仕であり、京都における大仏供養への積極的な態度とは異なっている。

前回・前々回の法要同様、今回も菩提山正暦寺と忍辱山円成寺が出仕している。

浄土系・浄土宗

今回も前回・前々回の法要同様、目を引くのは、京阪奈を中心とした浄土系である。特に浄土宗鎮西義では知恩院・百万遍・黒谷、西山義では深草派誓願寺が出る。粟生・永観堂・清浄華院は今回不参。

なお、山本博子・今堀太逸¹⁴⁾の両論文が『知恩院史料集』収載の知恩院『日鑑』を用いて、具体的に考察しているが、次の記載には触れていないようなので（勿論、両者は知恩院側を中心とした大仏勸進・京都勸化を論

じているのであり、当方とは関心の対象が異なるからではあるが）、資料として挙げておく。元禄五年三月の項で、

十四日

一 南都江為御名代正定院被遣二付、未明被致登山、於爰支度等、供侍宮崎弥兵衛・岡田政右衛門・神戸忠兵衛、

一 京御門中長老・平僧、各今日発足、右南都江被参、

一 大衆中右同断、(中略)

十六日

一 南都分正定院午上剋被帰、直登山、(中略)

十九日

一 奈良万僧供養当院行列之次第并諸事等記録載度由、東大寺分申来、書記龜筆難成、超勝院筆者頼度由、徳林院分手紙遣之、(中略)

廿三日

一 竜松院江徳林院分御状、并九閭院江先日法事之次第・行列等之記遣之、⁽¹⁶⁾
とある。

確かに、前稿にもあるように、各史料共通して三月十五日、京都知恩院代僧正定院と門中長老平僧百十人・伴僧百三十人という大所帯が法要に参列している。この時期、主要な各宗諸寺院の古記録、所謂『日鑑』類の残存状況を見ると、元禄期にまで遡れるのは殆どない。その意味からも、南都寺院以外で「万僧供養」に出仕している前後の状況が判明する記録の存在は貴重である。しかも東大寺側、就中、龍松院は法要の記録に完璧

を期する為、知恩院に照会している事が看取できる。

惜しむらくは、『知恩院史料集』『日鑑・書簡篇』一では、日鑑は元禄二年からなので、貞享五年（元禄元年）の記録は無く、書簡も元禄以前は延宝五年・天和三年のみであり、元禄四年分は閏八月頃まで、元禄五年分は八月からで、丁度元禄五年春の法要時期のものが欠けている。「日鑑・書簡篇」四も日鑑は宝永五年の次は正徳二年で、書翰も宝永五年分の次は宝永八（正徳元）年分なので、今次法要の宝永六年が丸々欠けていることである。

但し、山本論文が引用する如く、「日鑑・書簡篇」四所収『宝永五年日鑑』には、二月二十四日・八月四日に記事がある。特に後者は本文を引用していないので、両者併せて紹介する。

二月廿四日（中略）

一 南都竜松院登山、来丑四月中大仏堂供養仕候、其節大僧正并御門下等、如先規之、御出仕被下候様奉願候段申来候、（中略）

八月四日（中略）

一 南都竜松院使僧本空、弥当春願上候通、来四月堂供養二付、御下向奉奉願候、并前々御門中御出仕被下候、弥今度も御出仕候様被成可被下候、手前分も使僧遣可然候ハ、遣可申候、御指図被下候様、被申候事、⁽¹⁷⁾

隆光一派の威光が翳りだすと、京都では知恩院、江戸では増上寺を夫々東大寺は頼るようになる。
なお西山派に関しては、『京都永観堂禅林寺古文書』⁽¹⁸⁾に、関連する文書を見出せなかった。

また、『誓願寺文書の研究』⁽¹⁹⁾にも、関連する文書を検出できなかった。

浄土系・真宗（東西本願寺）

積極的な浄土宗に対して今回も東西本願寺は地味である。本山からの出仕もなく、殆ど南都・郡山・大坂からの出仕である。差定等の分析は、次項に譲る。また、前回見られた仏光寺派末寺の参拝等も記されていない。いずれにしても、宗を代表するのは多数派の東西本願寺であることは、現代と大差ない。但し、宗名は「一向宗」「浄土真宗」と揺らぎがある。これについては後考を俟ちたい。

浄土系・大念仏宗

前稿で「次の法要（宝永六年の大仏殿落慶法要）では愈々「融通念仏宗」と表記されるに至る（坂東俊彦「東大寺大仏と融通念仏宗」）」と書いたが、その坂東論文が、前掲した『東大寺三綱所日々記』の当該箇所を揭示してこう述べる。

六日曇天

御寺務へ相談也大念佛宗河州平野上人大佛／出仕法事有之衆僧二百人余也御寺務廳聞ニ／御出御供ニ参也
大通上人をはじめ二〇〇人あまりの僧侶が出仕して法要が営まれ、それを寺務（別当・安井御門跡道恕）が聴聞したことを記している。²⁰

また、ここでは「大念佛宗」であり、史料③も同様だが、①に「融通大念佛宗」、②で「融通念仏宗」と表記されていることにも注目したい。表記に多少の揺らぎはあるものの、最終的に「融通念仏宗」に収斂していく過程を垣間見る事が出来る。

浄土系・時宗（靈山派）

時宗は今回も初回同様、靈山派のみが参加している。この第二十五代國阿は全国を行脚していたとの傍証もあり、「踊躍念仏」も興行し、遊行派顔負けである。「時宗」との表記は見られない。

なお、前回法要に名のあった中で、『時衆過去帳』で寂年月日が判明するのは、元禄十年（一六九七）十二月二十三日「（京）法国寺覺阿」、元禄十三年（一七〇〇）八月二十三日「（七条）西光院「寺」素眼」である（『時衆年表』）。

禪 宗

今回は、先述の如く拈香僧衆のトップバッターに妙心寺の名が見える。

黄檗宗は史料③の『塩尻』にのみ記載があるので、予定はされたが出席しなかったのだろうか。按ずるに、前黄檗山住持の悦山道宗（えつさんどうしゅう一六二九～一七〇九）が宝永六年（一七〇九）七月二十九日、世寿八十一才で示寂した事と関係があるうか。

宝永六年（一七〇九）二月二十八日の昼頃、悦山は黄色の衣に緋の袈裟をつけて、笠をかむり短い杖を持って（中略）各寮舎をめぐるて歩いた。弟子たちは、隠元が示寂の数カ月前にこれと同じようなことをしたのを思い出し心配になったという。／四月頃になると、悦山は帰路がわからなくなったり、講義をして、意味がよくわからないことがあるようになったという。五月になると病気が重くなり、黄檗山住持の悦峰や多くの僧俗が見舞いに訪れたが、五月十九日から面会謝絶とし、見舞いの人には侍者が応対にあたった。七月になると病気がますます重くなり、まわりの者は湯薬をすすめたが、「齢八十を超えて何ぞ薬を用いん」と笑ってしりぞけた。七月二十七日には、左右の者が遺偈を求めた（中略）。二十八日には

医者が来て、粥を少し食べたが、医者には皆にそばをはなれないようにと言った。七月二十九日の午後二時頃に、弟子の祖春が末後の偈を請うと首をふって「不要不要」と言った。(中略) 静かに示寂した。⁽²²⁾

この悦山は元禄五年(一六九二)三月二十五日、奈良東大寺大仏開眼供養に際し、「黄檗宗悦山喝禪兩和尚」「導師摂州大坂舍利寺悦山和尚并喝禪和尚」「導師攝州大坂舍利寺悦山和尚」と各種史料に出るように、一山の導師を務めた事は前稿で紹介した。舍利寺の正式名称は舍利尊勝寺である。

元禄五年(一六九二)三月二十五日、奈良の大仏開眼供養が行なわれ、悦山は参列して拈香し祝偈を述べた。この年の六月二十五日に南源が示寂し、秉炬師をつとめた。⁽²³⁾

また、ペアで記載される喝禪は喝禪道和(一六三四～一七〇七)といい、

宝永四年(中略)十二月十三日に、喝禪が示寂し、悦山は秉炬師をつとめた。⁽²⁴⁾

とある。

時代は遡るが、貞享五年の鉾始法要時に「黄檗派禪宗山城 仏国寺高泉和尚 代僧心宗」「仏国寺高泉和尚 代僧心宗」「黄檗派仏国寺高泉和尚使僧心宗」等と前々稿の史料に出る高泉性^{こうせんしょうとん}激^{げき}「敦」について、

元禄四年(一六九二)、黄檗山第四代独湛は後任として独照、南源、高泉の三人を候補として推挙し、幕府は高泉を後住に選んだ。高泉は元禄五年(一六九二)一月二十一日に晋山して黄檗山第五代となった。四月には、江戸に行つて將軍に継席の謝恩をした。この年、了翁の喜捨によって、法堂、禪堂、齋堂、東方丈、西方丈および諸寮舎の修復が行なわれた。また各堂をつなぐ廻廊などを新しく造った。これらの事業によつて高泉は黄葉中興と称されている。またこの年は高泉の六十歳の年に当たっており、十月八日の誕生日にはお祝いが行なわれた。⁽²⁵⁾

とある。

法要には代僧を立てたが、公慶に贈った詩や疏である『佛国寺高泉贈公慶上人詩并序』『佛国寺高泉贈公慶上人千僧供養疏』が記録されている。⁽²⁶⁾

曹洞宗は今回検出できない。

律 宗

唐招提寺は三月二十八日、西大寺は今回、菩提山と同日の四月五日に出仕している。両者共、南京律というより、南都（平城京）七大寺としての出仕だろうか。北京律の泉涌寺は見えない。

日蓮・法華宗

法華寺院は、やはりと言うべきか不出仕である。今回は公儀主催であったが故に消極的だった可能性もある。また、元禄四年に不受不施の「軟派」である「悲田宗」が禁止された事も背景にあるのかもしれない。⁽²⁷⁾

三 三法要の比較

繰り返しですが、三法要とは、

貞享五年（一六八八）四月二日から八日までの大仏殿の^{ちようなはじめ}新始法要。

元禄五年（一六九二）三月八日から四月八日までの東大寺大仏開眼供養。

宝永六年（一七〇九）三月二十一日から四月八日までの東大寺大仏殿堂供養。

である。

この内、前稿で触れていなかった大仏開眼供養の史料を紹介する。先に掲げた特別展「東大寺公慶上人江戸時代の大仏復興と奈良」の解説付き図版目録（図録）に次の古記録が掲載されている。

出品番号 名称

頁数

所蔵者

53 東大寺年中行事記 一冊 紙本墨書 江戸時代 元禄五、六年（一六九二、三） 奈良・東大寺

64 春日社記録 一冊 紙本墨書 江戸時代 元禄五年（一六九二） 奈良・春日大社

この中で、後者の図版解説に「なお記録中の大仏開眼の法会次第は東大寺の記録を借用し、筆写している。〔坂東「俊彦」〕とある。図版を見ると、確かに、次のようにある。

まず表紙に「元禄五年^{壬午}日記」とあり、日次記の図版では、断片的な記述であることが読み取れる。適宜、半角空けで文意を補った。

（三月） 八日（中略）

一 東大寺大仏開眼供養始ル今日ヨリ三十ケ日ノ之間四月八日迄也（中略）

今日 勸修寺御門跡（中略）

十四日 大佛參詣 智恩院方丈代出仕也 長老大勢行ノ烈（中略）

十七日 夜中ヨリ雨降 昼迄大雨也（中略）

（ママ）
十七日 大佛出仕 靈山寺 十八日 法隆寺 十九日 黒谷長老（中略）

廿一日（中略）

今日 東大寺出仕 百万遍（中略）

廿二日 大佛西大寺出仕 廿三日 上之太子 南都一向二派朝ヨリ（中略）

廿四日晴天 大坂浄土宗出仕三十人（中略）

廿六日 興福寺大佛江出仕（中略）

四月（中略）／七日（中略）

今日大佛（中略）靈山（中略）躍念佛（中略）茶センウリ也／長吏ト云九十計老僧金ダンノ袋ニ鹿ノ角ヲ入棒ノ先ニ付テ（下略）

判読できかねる箇所も多いが、大略このような記載である。最後の空也僧に対する言辭は、神職ゆえか、差別意識を前面に出して詳述している。一部、他の史料と相違する点があり、それを是正する為か、上掲した日記の次に、前掲解説にあった「東大寺の記録を借用」した記録が出る。

大佛開眼供養諸寺出仕次第記 東大寺ニテ借本也

三月八日東大寺千部開關勸修寺御門跡
御導師 九日ヨリ毎日出仕 法隆寺 西大寺／

招提寺 十三日 智恩院方丈代浄土宗大坂ニテ見物 奈良一向黒谷々和弼ノ／

靈山寺 京ノ靈山丸山廿五日黄檗山二百人計僧 融通大念佛二百人僧／

誓願寺大坂ノ同宗旨 忍辱山 菩提山寺 陽觀堂 和束郷之内禪家／

百丈山大智禪寺 正法禪寺 京ノ靈山鉢扣 廿六日 雨天／

廿七日 興福寺（以下略）

「陽觀堂」は「永觀堂」の音通だろうが、いみじくも「ヨウカン」と読んでいた事が判明する。ただし、東大寺に現存する史料で、「陽觀堂」と表記するものはあるのだろうか。あるいは誤写か。

「鉢扣」は「鉢叩」の事だが、ここでも日記本文同様、空也僧を「京ノ靈山」と誤っている。按ずるに、どちらも「躍念佛」をする事からの誤認であろう（本当の「京ノ靈山」は「丸山」と共に、その前に記載）。

さて、大仏開眼供養の他史料と突き合わせてみると、幾つか相違点がある。

日記本文に「十四日 大佛參詣 智恩院方丈代出仕也」、「大佛開眼供養諸寺出仕次第記（以下、「次第記」と略す）」に「十三日 智恩院方丈代浄土宗」とあるが、前稿で掲げた他史料での「知恩院」出仕は全て三月十五日である。日記本文では十五日の記述がないので、誤記と考えられるが、では「次第記」は如何であろうか。そもそも、「次第記」には「法隆寺 西大寺 招提寺」と出るが、招提寺は三月十六日、法隆寺は翌十七日、西大寺は二十二日である。その点では日記の「十七日 大佛出仕靈山寺 十八日 法隆寺 十九日 黒谷長老」「廿二日 大佛西大寺出仕 廿三日 上之太子 南都一向二派」は正しい。「十七日 夜中ヨリ雨降 昼迄大雨也」との記述も、前稿史料⑤の「斯日大雨午時ヨリ雨晴タリ」と一致する。「廿四日 晴天 大坂浄土宗出仕三十人」の人数は、他では八十四人なので少ない。「廿六日 興福寺大佛江出仕」は前稿史料⑤に依れば「雨故今日興福寺ノ御寺務御出仕御延引」とあり、翌二十七日に順延している。これは「次第記」とも合致する。

「次第記」の「和芻ノ靈山寺」は三月十七日、「京ノ靈山丸山」は四月六日である。「廿五日 黄檗山二百人計僧」は前稿史料④と同じで、「融通大念佛二百人僧」は三月二十八日で二百三十〜二百五十人と他史料にある。「誓願寺大坂ノ同宗旨」は四月三日、「忍辱山」は円成寺の事で四月二日、「菩提山寺」は正暦寺の事で三月二十九日、「陽觀堂」は先に触れた通り「永觀堂」であろうが四月二日、「和束郷之内禪家百丈山大智禪寺 正法禪寺」と詳らかに記載してあるが、四月四日。つまり、順番はバラバラであり、どのような史料を写したのであろうか。

さて、本題に戻り、史料①に出る、東本願寺派の「徳願寺良胤」「専念寺祐誓」「教行寺了伯」の三寺三僧、及び同宗同派他寺の出仕を纏めてみよう（順不同）。重複出仕は太字で表記した。

前々回 徳願寺専信 専念寺祐圓 教行寺了伯 南蓮寺玄隆 光瀬寺春徹

前回 徳願寺專信 專念寺祐円 教行寺了伯 南蓮寺玄隆 光瀬寺淨晟 照光寺恵順

今回 徳願寺良胤 專念寺祐誓 教行寺了伯

同徒弟円空 法敬寺休円 永泉寺春安 応現寺知秀

教行寺了伯は三法要に出仕している事が判明した。

続いて西本願寺。東本願寺同様、①に出る「南都淨教寺行省」「正覺寺了宗」「郡山正願寺湛慧」「同所淨照寺遵海」の寺僧、及び同宗同派他寺の出仕を纏めてみよう（順不同）。一部割愛した。

南都

前々回 淨教寺行空 正覺寺了玄

弟子行蓮

末寺照光寺春海

末寺長泉寺

前回 淨教寺行空 正覺寺了賢 常称寺了玄

行空弟子行蓮 了賢弟子了宗

淨教寺末寺西方寺月舟

淨教寺末無量寺受教 受峯 円達 了海 是空 雲月 一祐 義海

今回 淨教寺行省 正覺寺了宗

郡山

前々回 光慶寺正意 淨照寺空山 正顯寺榮春（※郡山地域に正願寺はあれど正顯寺なし）

末寺信行寺正玄（正願寺カ）

前回 光慶寺正意 浄照寺清遵 正願寺祐智 善照寺玄了 誓得「傳力」寺可祐 教誓寺受玄

正隆 遵昌

円照寺恵賛 法成寺恵閑 教念寺番龍 妙応寺円海 正光寺是心

今回 浄照寺遵海 正願寺湛慧

こちらは、三法要に全て出仕している者はいなかった。なお、前々稿では史料に「正顯寺」とあったので、寺院の比定が出来ず、空欄にしていたが、その後の二法要では「正願寺」と出ていた。郡山地域に正願寺はあれど正顯寺はないので、ここは「正願寺」であつたろう。現存する寺院である。

四 真宗と時宗・融通念仏宗の対比

一部、前稿を踏襲する。

法要の順序・日程

貞享五年時は、全七日間の日程中、第六日目に、東・西本願寺、大念佛宗・靈山時宗の順で出仕した。

全体を見ると、南都諸宗・寺以外では、初日に浄土（西山）誓願寺、三日目に黄檗、五日目にも黄檗・浄土（西山）、六日目に浄土（鎮西）・東西本願寺、大念佛・靈山時宗であつた。最終日の前日に、西山派以外の浄土系がまとめられていることが判る。

元禄五年時は、三十一日間中、十六日目に東・西本願寺、翌十七日目に郡山浄土真宗（西本願寺）、二十一

日目に大念佛宗、二十九日目に靈山時宗、三十日目に遊行時宗と空也堂僧、である。ほぼ、前回の順番と同じ組み合わせであることが判る。法要の後半にまとめられているという点でもある。靈山が先で遊行が後、というのも室町時代なら騷擾になったであろう。按ずるに、靈山は前回参列した、という故事来歴を主張したのであろう。空也堂も新規の参加ゆえに結願法要の後に回されたのかもしれない。

今次宝永六年は十八日中、四日目に東本願寺、五日目に靈山時宗、六日目に西本願寺が出仕している。因みに、六日目には遊行時宗の代僧が拈香している。そして十六日目に融通念仏宗が最大七百人の陣容で出仕している。

三法要を通じて、人数では融通念仏宗が他を圧倒し、時宗では靈山派の積極性が明らかになった。

法要の差定

今回、差定らしきものを記載しているのは史料②だけなので、それを見ていく。

東本願寺派「先唄 次焼香 次三誓偈 次讚 次念仏回向 次退出 行列仕丁六人 上下着四人 素襖十人 僮僕雑々」

西本願寺派「先伽陀 次阿弥陀經行道 次回向 次念仏 次退出」

靈山正法寺・丸山安養寺・東山長樂寺「先伽陀 次敬礼天人 次無常偈 次踊躍念仏 次願以此功德 次

十念 次退出」

融通念仏宗「先三拝 次讚鉢 次転読法華經 次梵網經 次釈迦宝号大道 次大念仏回向 次退散」

ほぼ、前回を踏襲している。東本願寺は「三誓偈」で西本願寺は「阿弥陀經」である。これはおそらく、時間の関係だろう。偈文の中で短い部類の代表として偈文の中では「三（重）誓偈」、經典では「阿弥陀（小）

経」を選んだものと想像できる。

時宗は「踊躍念仏」、融通念仏宗「法華経」「梵網経」「大念仏回向」、と宗の独自性を前面に出している。但し、時宗の三大行儀といえは、「遊行・踊躍念仏・賦算（念仏札配り）」であるが、「賦算」に関しては、主流の「遊行派」と京都において嘗ては有力であった「四条派」、関東では「当麻派」の、所謂「専売特許」であった。三法要に欠かさず出仕した「靈山派」は「賦算」こそしないものの、伊勢熊野参詣に障りなしとする「柏の護符」を独自に頒布していた筈である。²⁸現に、前回法要では「禪門講柏葉御判。國阿上人杖木履素襖著小結著白張傘」「禪門柏葉御判國阿上人杖木〔・〕履。素襖。小丁。傘持。」「禪門柏葉御判國阿上人杖木履。素襖小結。白丁。傘持。」「禪門柏葉御判國阿上人杖木履素／襖小結白丁傘持」とあるので、「柏の護符」の版本を持参していた可能性がある。護符も配れば、より注目度も増したであろう。

跋 まとめにかえて

三法要を概観して以上の分析から、この盛儀出仕を宗勢拡大や知名度上昇の機会と捉えている時宗や融通念仏宗の存在が明らかになった。黄檗宗の活躍が今回見られないが、先に考察したように、中心的存在の僧の闘病があった為と考えたい。但し、今次法要ではないが、黄檗僧の特長でもある、書や偈・疏・詩作が求められた事例もあった。

平岡定海が項目執筆をした小学館『日本大百科全書』の「大仏開眼供養」の要旨を述べれば、奈良東大寺大仏の入眼の儀式で、新造の仏像・仏画に眼を入れ霊を迎えるのが開眼供養である。東大寺の大仏の開眼供養は

数回行われているが、その最初は七五二年（天平勝宝四）四月九日にインド僧の菩提僊那ぼだいせんによって行われたものである。

それを考えれば、当初から国際色豊かであった儀式に、黄檗の渡来中国僧が花を添えるのは必須のことであつた。それだけに、この「堂供養」にその姿が見られなかったとすれば、随分寂しいものになった感懷は否めないだろう。

併せて、幕府肝煎りの浄土宗鎮西派の積極性も特筆すべきである。それに対抗していた、浄土宗西山派は今次法要に関しては消極的であつた。

では、真宗はというと、他宗の法要で存在感を示すよりも、自身の教団内で正信偈和讃や御文章を中心とした法要を着実に実施する道を選んだのではなからうか。他宗寺院を舞台にするという制約の下、短時間で法事を済まさなければいけないのであれば、宗主がわざわざ出張する必然性もなく、終始代僧で済ませた意味も理解できる。掛軸の本尊を持参した可能性はあるが、真宗の自分は親鸞の讃嘆である。宗祖の末裔が儀式を執行する意味は、あくまでもその廟所でなければならないのである。

ただ、興行として、拝観・見物する側に立てば、例えば東本願寺特有の坂東曲ばんとうがしを披露するなどの工夫やサービスがあつても然るべきであつた。真宗のアイコンとして、南都の人々の記憶に残つたであろう事を夢想すると、何とも惜しい気がするのである。もつとも、教団側に立てば、貴種を人目に晒さず秘匿する事で、權威や象徴性を高める効果はあつたであらう。

同様の事は、融通念仏にも言える。現在、聖聚来迎会と阿弥陀経万部会が融合された融通念佛宗総本山大念佛寺最大の伝統行事の通称名を「万部お練り」という。例年五月のGWは二十五菩薩来迎会で大いに同寺境内が賑わっている。これを東大寺で行えば出仕人数の多寡に拘らず、話題になったであらう。「練り供養」の源

流は源信所縁の當麻にあるというから、現在行なっている當麻寺も、あるいは百万遍知恩寺も、披露すればなお一層、盛り上がった事だろう。

現在の寺院では、音楽のコンサートやイベントで集客する取り組みが盛んである。しかしそれでは、文字通り「庇を貸して母屋が乗っ取られている」状態ではない。もしも現代に、本当の意味での千僧万僧供養式を行おうとするならば、どのようにしていけば良いのだろうか。どれだけの社会的反響を呼べるのであろうか。今から三百年前の先人たちに学ぶ事、学べる事は大きい。そしてそれを考える事は決して無駄ではないと思う。結局、この三法要後の各教団も、社会も、連帯せずに内向きになって行った感がある。天平の伽藍よりも、一回り小さく狭い元禄の大仏殿でさえ、縮みゆく今となつては持て余す程の存在になりつつある。公慶の一大事業が負の遺産と成り果てぬよう、我々も不斷の努力をしなければならない。

無事に円成することだけが目的化した僧侶の為だけの法要にならぬよう、今後も自身の課題として取り組んでいきたい。

註

- (1) 古賀克彦「近世の東大寺大仏千僧会等における真宗と時宗・融通念仏宗の対比」(『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』34、二〇一八年)。
- (2) 古賀克彦「元禄五年の東大寺大仏開眼万僧供養に於ける真宗と時宗・融通念仏宗の対比」(『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』No.35、二〇一九年)。
- (3) 以下、この項に於いて、論文は○、単著は◎で弁別する。順不同。

○平岡定海「江戸時代における東大寺大仏殿の再興について―勸修寺藏「大仏殿再興発願以来諸興隆略記」を中心として

―「〔南都佛教〕二四号、一九七〇年。〔史料〕として、『大仏殿再興發願以來諸興隆略記』の翻刻も付す。のち、次項著作の本文篇と史料篇に、それぞれ所収。

○平岡定海『日本寺院史の研究』中世・近世編、吉川弘文館、一九八八年。

○平岡定海『東大寺の歴史』至文堂（日本歴史新書83）、一九六一・一九六六・一九七七年。

○平岡定海・山口光朔『東大寺』社会思想社（現代教養文庫290）、一九六八年。

○平岡定海『大佛勸進ものがたり』大蔵出版（大蔵新書8）、一九七七年。のち、次項著作として新装復刊。

○平岡定海『大佛勸進ものがたり』吉川弘文館（読みなおす日本史）、二〇一四年。

○平岡定海『東大寺』教育社（教育社歴史新書（日本史6））、一九七七年。

（4） 註（3）に掲示の平岡定海「江戸時代における東大寺大仏殿の再興について」（掲載誌七一頁。著書七〇二・七〇三頁）。なお、ここに出てくる大屋徳城「東大寺史」は、平岡明海「編纂及発行」『東大寺史』華嚴宗東大寺、一九四〇年・一九四三年再版、を指すと思われる。扉や凡例、奥付に明記されていないが、同書の「華嚴宗管長、東大寺別當 鷲尾隆慶」の「序」に、

幸に、友人大屋徳城氏は本職の懇望を容れ、拮据勉勵、極めて短日月の間に、本書を草して、希望に副はれしことは、本職の感謝して措かざる所である。

とあることから判明する。

その他、次の著作・論文も重要である。

○堀池春峰（東大寺「監修」・東大寺史研究所「編」）『東大寺史へのいざない』昭和堂、二〇〇四年。

（同書二七～二八頁に、「大仏殿再興には、公慶の出願によって、元禄十年九月に十万両勸進の許可をあたえ、五カ年にわたって諸大名・諸臣の石高百石につき金一分の拠出を命じて積極的に助力されることになった。」とある）

○林亮勝「元禄の大仏殿再興について 将軍家のかかわりを中心として」（南都佛教研究会「編集」『南都佛教』四三・四四合併號、東大寺図書館、一九八〇年）。

○古川聡子「近世奈良町の都市経済と東大寺復興」（『ヒストリア』一六九号、大阪歴史学会、二〇〇〇年）

なお、東大寺龍松院に関しては、次の論文もある。

○筒井英俊「龍松院家の人々」（『大和文化研究』十一卷八号、一九六六年。のち、筒井寛秀「編」『東大寺論叢』〔論考篇〕

国書刊行会、一九七三年、第一部第七章）。

- (5) 佛書刊行會「編纂」『大日本佛教全書』一二二卷「東大寺叢書」第二。原本一九三三年・復刻一九七八年、第一書房、一〇三〜一七頁。

- (6) 島津良子・坂東俊彦「玉井家蔵「大仏殿再建記」解説および史料翻刻」第三回（南都佛教研究会「編集」『南都佛教』八九號、東大寺図書館、二〇〇七年）。

- (7) 天野信景『塩尻』三十三（日本随筆大成編輯部「編」『日本随筆大成』第三期十四、吉川弘文館、一九七七年）。同書一八一〜一八五頁。この史料は、吉田栄治郎「近世大和の三味聖——国仲間組織をめぐって——」（細川涼一「編」『三味聖の研究』硯文社、二〇〇一年）の本文に『塩尻』三十三の大仏殿堂供養にかかわる記事」と紹介され（同書一五一頁）、註に、

『日本随筆大成』（第三期）十四所収（吉川弘文館、一九七七年）。この記事には「これは供養の時板に彫て売ける記なり」と付記されており、法事内容は「大仏殿堂供養記」にはほぼ一致することからそれなりの信を置くことができるだろう。

とある（同書一六八〜一六九頁）。

- (8) 古賀克彦「近世の霊山・国阿跡衆について」（『時衆文化』十三号、時衆文化研究会、二〇〇六年）。

- (9) 細川涼一「編」『三味聖の研究』一五一頁。

- (10) 細川涼一「編」『三味聖の研究』一五〇〜一五一頁。

- (11) 以上、細川涼一「編」『三味聖の研究』一六八頁。

また、同書には、以下の論文も所収されている。

- 上別府茂「摂州三味聖の研究——特に千日墓所三味聖を中心として——」（初出『尋源』三十号、大谷大學國史研究会、一九七八年）。

- 吉井敏幸「中世・近世の三味聖の組織と村落——大和国の場合——」（初出『部落問題研究』一四五輯、一九九八年）。

○杣田善雄「元禄の東大寺大仏殿再興と綱吉政権」（初出『南都佛教』四三・四四合併號、東大寺図書館、一九八〇年）。のち、同「幕藩権力と寺院・門跡」思文閣出版（『思文閣史学叢書』、二〇〇三年、「第二章 元禄の東大寺大仏殿再興と綱吉政権」。元となった二〇〇二年の京都大学学位論文「幕藩権力と寺院・門跡」の要旨および「論文内容の要旨」「論文審査の結果の要旨」が京都大学学術情報リポジトリ「紅」で見える事が出来る。なお、全くの余談だが、google booksの藤井

学『本能寺と信長』の出身は何故か柚田善雄『幕藩権力と寺院・門跡』である。二〇一九年十月二十八日閲覧。

- (12) 上別府茂「三昧聖と葬送―行基系三昧聖を中心として」(五来重・桜井徳太郎・大島建彦・宮田登「編」『講座 日本の民俗宗教』二「仏教民俗学」、弘文堂、一九八〇年。二二九・二三九頁)。

- (13) 古賀克彦「河内国壺井通法寺に就いて―羽曳野市通法寺址の隆光墓碑に因んで―」(『印度學佛教學研究』五四卷二＝一〇八号、四天王寺国際仏教大學における第56回學術大会紀要2、日本印度學仏教學会、二〇〇六年)。

- (14) 山本博子「江戸期における東大寺再建について」(『印度學佛教學研究』三四卷一＝六七号、花園大學における第36回學術大会紀要1、日本印度學仏教學会、一九八五年)。この報告を承けて次の論文が重要である。

山本博子「江戸時代における知恩院と東大寺―特に東大寺塔頭竜松院をめぐる―」(『鷹陵史学』一二号、同会、一九八六年。以下、山本論文と略す)。

- (15) 今堀太逸「大仏再興の勸進と浄土宗の支援」(徳川綱吉・桂昌院と増上寺貞誉了也、贈大師号」(同『浄土宗の展開と総本山知恩院』法藏館、二〇一八年、第V部「東大寺大仏勸進と法然贈大師号」の第一章・第二章)。

なお、今堀著作当該箇所は註で、

『大仏殿再興発願以来諸興隆略記』(略称『興隆略記』)の引用は、平岡定海「(史料)大仏殿再興発願以来諸興隆略記」(『南都佛教』二四号、一九七〇年)による。書誌については同「江戸時代における東大寺大仏殿の再興について―勸修寺蔵「大仏殿再興発願以来諸興隆略記」を中心にして―」(同二三号、一九七〇年)参照。(同書三七八頁)としているが前掲の通り、両者は同一の『南都佛教』二四號所収である。

また、同じく同書の註で、

『大仏殿新始千僧供養私記』(『大日本仏教全書』威儀部一)。出仕の僧名も記載されている。

一、北京知恩院寺中同京門中僧名(以下略。同書三七九頁)

とあるが、原典と照らすと一部に記載漏れがある。

同書の註の話ばかりで恐縮であり、当方も同じ間違いをしていたので、他人の事は言えないのだが、

島津良子・板東俊彦「玉井家蔵『大仏殿再建記』解説および史料翻刻 第一回」(『南都佛教』八六号、二〇〇五年)。(同書三七九頁)

島津良子・板東俊彦「玉井家蔵『大仏殿再建記』解説および史料翻刻 第二回」(『南都佛教』八六号、二〇〇五年)。

(同書三八〇頁)

とあり、人名索引でも「坂東俊彦」とあるが(同書横組6頁)、これは全て「坂東俊彦」である。自戒を込めて訂正を提言する。また屋上屋を重ねれば、前者の「史料翻刻 第一回」(『南都佛教』八六号、二〇〇五年)は正しいが、後者の「史料翻刻 第二回」(『南都佛教』八六号、二〇〇五年)は八八号(二〇〇六年)である。

(16) 以上、総本山知恩院史料編纂所「編」『知恩院史料集』「日鑑・書簡篇」一、一九七四年、一四六―一四七頁。

(17) 以上、総本山知恩院史料編纂所「編」『知恩院史料集』「日鑑・書簡篇」四、一九八五年、一二・一六五頁。「如先規之」とは、貞享五年の大仏殿の新始法要を指すか。

(18) 宇高良哲・福田行慈・中野正明「編」『京都永観堂禅林寺古文書』文化書院、一九九二年。

(19) 誓願寺文書研究会「編」『誓願寺文書の研究―戦国・京都・総本山』岩田書院、二〇一七年。

(20) 坂東俊彦「東大寺大仏と融通念佛宗―東大寺江戸修復興期を中心に―」福原隆善「監修」・開宗九〇〇年記念・大通上人三〇〇回御遠忌奉修局「編」『融通念佛宗における信仰と教義の邂逅』法蔵館、二〇一五年、四六四頁。

(21) 高野修「口絵解説 絹本着色国阿上人随心像」(『時宗教学年報』十六輯、時宗教学研究、一九八八年)に以下の解説がある。

題簽にはさらに「此上人若かりし時より回国の志有て享年三十に及て西国行脚、四十にして四国遍路五十二乃載に至て東国・坂東・秩父・羽黒湯殿山・塩竈浦・松嶋・筑波・日光山・鹿嶋神社・鎌倉・大山・妙儀山・信州善光寺・木曾路のこなたかなためくり悉して残る方なし、近くハ享保丙申の年正月元旦を伊勢参拜一千日の初参として同戊戌の年に至て其巧見らぬ。又四年四月晦日に足を發して出雲石見をこえて西海道九ヶ国に行脚す。いささかも行法いとまなしといへとも和歌の浦波を分て玉を拾へる事すぐなからず、されはやつかれの知己たる事としあり、故に都重雅内の求に求し侍る事しかなり」とあって和歌「法の声の起りもあらし伊勢の海やきよき渚の鶴の千とせも」を書きとめている、これによると国阿上人は坂東から松島・日光・鎌倉・大山にも回国しているが「国阿上人伝」には、そうした地域に回国した記録はないなどから、この国阿上人随心画像は享保期に国阿上人であつた某上人の画像ではないかと推論するらしいである。(中略) 東京白金松秀寺蔵である。

(22) 木村得玄『初期黄檗派の僧たち』春秋社、二〇〇七年、一二三―一二四頁。

(23) 木村得玄『初期黄檗派の僧たち』二二七―二二八頁。「秉炬」(「ひん」は「秉」の唐宋音)禅宗で、火葬の時、棺に火を

つける儀式。後には、火をつけるしぐさを示すだけとなった。下火とも言う（『精選版 日本国語大辞典』小学館）。

(24) 木村得玄『初期黄檗派の僧たち』一二五頁。

(25) 木村得玄『初期黄檗派の僧たち』九〇頁。

(26) 小島裕子「大仏殿新始・千僧供養・油倉宝物御覧に関する勸修寺所蔵の法会記録―東大寺大仏開眼供養復原（三） 翻刻および解題―」（『勸修寺論輯』五号、勸修寺聖教文書調査団、二〇〇八年）

(27) 例えば、今江廣道・小沼修一「校訂・久我通誠『通誠公記』二（續群書類従完成會『史料纂集 古記録編89』、一九九〇年）に、次の標出を持つ記事がある。

元禄四年五月十二日条標出「日蓮宗不受不施の一派悲田宗と號す／幕府悲田宗を禁じ宗旨改をなす／悲田宗は受不施又は他宗に改めしむ」（同書一二八頁）

同十四日条標出「武家傳奏より再び悲田宗に關する通達あり」「家内并に知行所に悲田宗あらばその人數及び改宗せる旨の證文を取り武家傳奏に届出づべし」（同書一二九頁）

同十八日条標出「悲田宗信者家内并に知行所に存せざる旨武家傳奏に届出づ」（同書一三〇頁）

(28) 古賀克彦「『口絵解説』国阿画像」（『時衆文化』三号、時衆文化研究会、二〇〇一年）。

（国府台女子学院高等部教諭、近世仏教史）

表 法要対照表

宝永六年	史料①大佛殿堂供養記	副題等	三月廿一日	三月廿二日	三月廿三日	三月廿四日
	史料②大佛殿再建記	開闢・華嚴會・専寺學侶。兩堂ヶ院末寺等衆僧出仕。都合四十九口。舞樂十有之也。	導師・當寺別當・兼安井門主・道恕前大僧正・華嚴會・辰ノ魁・當寺ノ學侶・兩堂衆末寺等・四十八人・真言院二集會ス	法事無之。公盛上人出仕。	午廻。法事。専寺學侶中出仕勤之。講問。	妙心寺惣代・拈香有之。聖澤院・山座元。同講經問。首座定・首座。松百座也。大高座上向・佛前設香爐也。京鹿谷法然院・同拈香有之。日中法事出仕者。東本願寺門徒・德願寺・權律師・良胤。伴僧十二人。同専念寺・祐誓。伴僧八人。同教行寺・了伯。伴僧四人。各于大佛殿出仕。法事勤之也。
	史料③塩尻	南都東大寺・大殿落慶上棟儀・宝永六年己丑三月十七日	導師・安井道恕・大僧正・東大寺衆徒・同末山僧侶・梅尾尚「高力」・山寺・安倍山・崇敬寺・高山法・樂寺・新薬師寺・防州・凡出僧百口・衆人五十員・承仕十五人・小綱十人・公人三十五人・舞樂十番	佛前加持・公盛上人・勤ム之・ヲ會中・毎口有之	辰刻・京東本願寺・派南都二箇寺・并伴僧二十四人・出仕・先・咽・次・焼香・次・三誓偈・次・讀・次・念仏・回向・次・退出・行列・仕・丁六人・上下着四人・素襖・十人・僮僕・雜々	同・東門・淨土・真宗・六十口・
	史料④宝永再建大仏殿	辰之刻・御寺中・不殘・眞言・院工・御添「参力」	佛前加持・公盛上人・會・中・毎口・御勤	已之刻・寺中・御出仕・論義・有之・候事	辰刻・南都一向宗・出仕・京・都・靈山・丸山・長樂寺・出仕・京・妙心寺・惣代・同・鹿谷・法然院	南都東本願寺・門中・辰ノ刻・二京・妙心寺・衆念番・「珍香力」有・靈鷲山・正法寺・安養寺・長・樂寺
	史料④a宝永再建大仏殿	東大寺・大佛殿堂供養二付・諸方ヨリ・出仕之・覺	東大寺	東大寺	南都東本願寺・門中・辰ノ刻・二京・妙心寺・衆念番・「珍香力」有・同日・靈鷲山・正法寺・安養寺・長・樂寺	南都東本願寺・門中・辰ノ刻・二京・妙心寺・衆念番・「珍香力」有・同日・靈鷲山・正法寺・安養寺・長・樂寺
	史料⑤宝永六年再建大仏殿	東大寺・大佛殿堂供養二付・諸方ヨリ・出仕之・覺	東大寺衆僧末寺・追	(余空欄)	東大寺	南都東本願寺・門中・辰ノ刻・二京・妙心寺・衆念番・「珍香力」有・同日・靈鷲山・正法寺・安養寺・長・樂寺

三月廿五日	午廻。法事。專寺學侶中相助之。大機悔實號等也。從眞言院出仕。公人。承仕。小綱等供奉也。紀州高野山常樂院。谷總代藏院快惠。成壽院快雅。東光院義盛。聖覺院快盛。不動院盛任。右五人各於大殿拈香有之也。	辰刻今日(京)靈山正法寺丸山安養寺東山長樂寺并寺僧衆僧十五人出仕。先伽陀次敬礼天人。次無常偈。次誦羅念仏。次願以此功德。次十念。次退出。先ッ午ノ刻當寺學侶出仕。先ッ大機悔次仏前二立列メ釈迦宝号七反次退出。拈香僧衆。紀州高野山常樂院谷總代。	(※記載ナシ)	午刻寺中出仕上人様御(※空欄)	斷被仰御出仕無之高野常樂院谷總代	(※空欄)
三月廿六日	遊行上人代僧。京都莊嚴寺覺阿。同七條宗壽院兩人共。于堂內出仕拈香有之。播州淨土寺惣代歡喜院。同拈香有之。日中。出仕法事者。西本願寺門徒。南部淨教寺民部卿行省。同末寺十四ヶ寺。正覺寺了宗。從僧四人。郡山正願寺湛慧。從僧同斷。同所淨照寺遵海。住。法事勤之。	午刻京西本願寺派南部郡山四箇寺并其末寺十四人伴僧十七人出仕。先伽陀次阿弥陀經行道次。同向次念仏。次退出。拈香僧衆。遊行上人代京都莊嚴寺。播州淨土寺代歡喜院。	南京西門中五十口	午刻本願寺門徒寺僧出仕。遊行上人代京莊嚴寺。播州淨土寺代歡喜院。	南部西本願寺門中	南部西本願寺門中
三月廿七日	河川(州)上太子惣代無量壽院。大殿出仕。拈香有之。	拈香僧衆。河州上太子無量壽院。	藥師五十口	河州上太子代。無量壽院。	藥師寺	藥師寺
三月廿八日	南部唐招提寺一山之學僧出仕。日中法事勤之。散華行道。還列之時。音樂等有之。	午ノ刻唐招提寺衆僧三十五人出仕梵網會。	招提寺七十五口	招提寺衆中出仕。	唐招提寺	招提寺
三月廿九日	高野山學侶惣代三和院堯英。於佛前拈香有之也。已廻。法事。從南部藥師寺一山堂學(僧)不殘出仕勤之。散華行道。出仕還列等音樂有之也。日中法事。專寺學侶兩堂出仕相勸之。從眞言院出仕。小綱。公人。承仕。三役等供奉。裝束袍服衲衣。下臈者青甲也。出仕還列音樂舞樂十有之。如開闢也。寺務前大僧正追想。聽聞所御出仕也。其行粧無作法也。堂內聽聞所設之者也。	午刻藥師寺衆僧十五人出仕。行列同招提寺四箇法用。未刻當寺學侶出仕。拈香僧衆。紀州高野山學侶惣代三和院。	舞樂如初日。興福寺導師大乘院貫主。降尊。同寺衆僧一百員。衆徒二十人。中綱十人。承仕二十人。公人三十人。	午刻藥師寺衆中出仕。未ノ刻東大寺。舞樂有之。中宮寺様御參詣。圓照寺様尼衆參詣。ま んちう折遣之。	舞樂有之。	舞樂有之。

三月晦日	京都智積院惣代明星院覽智。 荏香僧衆。 紀州護持院代僧梅心院。 和州武藏護持院代梅心院。 武藏成滿院前大僧正代僧正春。 初瀬小池坊代月輪院。 同國護國寺前大僧正代僧覺心。 武藏成滿院代超昇寺。 紀州金剛峯寺聖方惣代常徳院。 大坂天王寺一心寺。 河州譽田大滿院。 右八人。 各於佛前拈香有之。	荏香僧衆。 紀州護持院代明星院。 武藏護持院代梅心院。 初瀬小池坊代月輪院。 武藏成滿院前大僧正代僧正春。 初瀬小池坊代月輪院。 同國護國寺代代覺勝院。 紀州高野山聖坊惣代常徳院。 河州天王寺一心寺。 河州譽田大滿院。	紀州高野山衆僧凡二百余口	京都智積院代明星院。 初瀬小池坊代月輪院。 武藏成滿院代超昇寺。 紀州護國寺代代覺勝院。 紀州高野山聖坊惣代常徳院。 河州天王寺一心寺。 河州譽田大滿院。	長谷寺名代月輪院	長谷寺名代月輪院
四月朔日	京都知恩院名代如來寺出仕。 衆僧二百口餘。 於大殿出仕。 法事勤之。 同日未廻。 和州畑之郷眞言宗同出仕。 法事勤之也。 勢州松坂樹教寺隨譽上人。 衆僧十六人出仕。 於佛前拈香有之。	已刻京知恩院代如來寺并門中長老老五千人平僧六十四人伴僧五十人。 午刻和州畑郷〔郷〕眞言宗衆僧十六人出仕。 拈香僧衆。 勢州松坂樹教寺。	北京智恩院尊統法親王。 円理大僧正。 衆僧凡一百三十五口。	知恩院代如來寺門中上下凡六百人余。 午之刻和州畑郷勢州松坂〔坂〕樹教寺。	京都知恩院名代三百人余	京都知恩院名代三百人余
四月二日	金剛山大宿坊名代地藏院宗順。 於佛前拈香有之。 日中法事者。 當國法隆寺一山之大眾不殘動之也。 山州醍醐三寶院跡御使者。 拈香有之。 門跡御使者。 拈香有之。	已刻法隆寺衆僧三十二人出仕。 拈香僧衆。 河州金剛山大宿坊代地藏院。 醍醐三寶院御門跡御使者。	法隆寺出仕。 河州金剛山大宿坊名代地藏院。 醍醐三寶院様ヨリ御使者御香儀金五百疋。	法隆寺	法隆寺	法隆寺
四月三日	京知恩願寺名代法雲寺。 於佛前拈香在之也。 日中法事。 坂陽知恩院門中動之。	午刻京知恩院派大坂衆僧八十一人伴僧百七十七人出仕。 拈香僧衆。 京誓願寺代法雲寺。	西大寺衆僧凡七十口。 畑郷密宗六十口。	京知恩院派大坂〔坂〕門中出仕凡上下五百人余。 京誓願寺代法雲寺。	大坂知恩院門中八拾ヶ寺。 余畑郷中ノ寺。	大坂知恩院門中八拾ヶ寺。 余畑郷中ノ寺。
四月四日	和州三輪山平等寺。 吉祥院。 常樂院。 桂林院。 右各於佛前拈香有之。 同國內山水久寺惣代無量院。 同國矢田金剛山寺惣代南僧坊。 同國金剛山惣代實相院。 右三ヶ寺各同拈香有之。 日中法事。 攝州大坂淨土宗百萬遍門中各出仕動之。	午ノ刻京百萬遍知恩院〔寺〕派大坂衆僧六十人出仕。 拈香僧衆。 和州三輪山平等寺。 同國內山水久寺惣代。 同金剛山惣代。 同矢田寺惣代南僧坊。	内山僧衆六十口。	京知恩院〔寺〕派大坂〔坂〕百萬遍門中出仕。	大坂百萬遍門中	大坂百萬遍門中
四月五日	大坂〔坂〕天満淨土眞宗三光寺。 於佛前拈香有之。 已廻。 西大寺一山衆僧出仕。 法事勤之。 同未廻。 菩提山正曆寺一山衆僧出仕。 法事勤之。 從新大典侍局御代參。 於佛前拈香有之。	已刻西大寺衆僧三十二人出仕。 最勝會。 未刻菩提山正曆寺衆僧二十人出仕。 拈香僧衆。 大坂淨土眞宗三光院〔寺〕。	菩提山僧衆五十口。 谷口僧衆四十口。	已之刻西大寺衆出仕。 未刻菩提山出仕。 大坂〔坂〕淨土眞宗三光院〔寺〕。	已ノ刻西大寺。 未ノ刻菩提山。	已ノ刻西大寺。 未ノ刻菩提山。

四月六日	和州釜口山惣代成就院純盛。 同善賢院圓榮。同國西松尾寺惣代福壽院。同國當麻寺惣代地藏院。右四人各於佛前拈香有之。日中法事。河州平野融通大念佛宗大通和尚出仕勤之。衆僧凡二百人餘。	午刻融通念仏宗河州平野大通上人并門中衆僧二百十五人伴僧四百三十人出仕。先三拜次讀鉢次転読法華經次梵網經次釈迦宝号大行道次大念仏回向次退散拈香僧衆和州釜口惣代成就院同西松尾寺惣代福壽院同當麻寺惣代地藏院	平野大通上人并門中衆僧貳百十五人出仕下々共凡七百八人余 和州釜口惣代成龍院同西松尾寺惣代福壽院同當麻寺惣代地藏院	平野大念佛寺	
四月七日	攝州大阪〔坂〕黒谷門中淨土宗出仕。法事勤之。興福寺一乘院門跡御兒多喜宮御參詣。於佛前大高座上御燒香有之。坊官諸大夫御門下寺僧等御供也。供奉之行罷。略式之儀也。京桃尾山龍福寺。大門院賢清。同安樂院圓海。各於佛前拈香有之也。堂内東方大衆床之後邊に樂人之座儲之。毎日從諸山一出仕法事之度。散華行道。出仕還列等に音樂奏之者也。申廻龍松院内之衆僧等出仕。兩部秘法修之。拈香等有之也。	(※「第十七日」欠)	忍辱山僧衆三十九口 出御供參也	京黒谷金戒光明寺派大阪〔坂〕門中出仕 和州桃尾山龍福寺同安樂院	大坂黒谷門中
四月八日	結願之法事。最勝會執行。先辰廻集會鐘突之也。于時專寺末寺衆僧諸役人等。於眞言院集會而。大佛殿出仕。行列装束等如開闢也。勅使御下向無之。雖然如開闢御座之儲有之也。公盛上人別床出仕。其莊如開闢也。導師安井門主前大僧正道恕御出仕。	結願導師當寺別當兼安井門主道恕前大僧正最勝會 巳ノ刻當寺ノ學侶兩堂衆末寺等四十八人出仕	舞樂如初日 東大寺向〔高力〕山寺崇敬寺法樂寺新樂師寺 大和國中聖方凡五百員 ※参考『南都大佛殿供養之次第』註21 五畿内聖都合九十七人 右ノ外毎日燒香諸宗僧侶至回向日凡一万三千余口ト云々	已之刻寺中不殘御出仕 法事相濟申候上尔て大和河内聖人數九十六人燒香 但堂外尔て初之	東大寺安井御門跡
		受齋僧 一万百二十人 受齋俗十五万三千三百六十人 仏講并二僧俗ノ僮僕等			